顏相子 文集

へ 5
2119

帝室博物館圖書

藤寧潔氏遺愛之記
明治四年四月廿四日
藤寧潔氏寄贈

帝室博物館圖書
別 利5
雜 2119
卷

類林文集中

御玄猪

細川家の茶の京都の御内儀より
のぐりし比 近衛左大臣基凞公御茶く
めしてはまつ〳〵御菓子をりめ〳〵り
碁石形にしてうすく薄くする餅にして作
せりさらしてうすい此餅をすのこ 御玄猪
なりし宸宴供物のあまりしいさき
おすもじ子あまてはれを王道の興癖と
てしたい國栖肢赤の蓑十月朝日氷魚と
いふ魚を公卿より給はるあるの旧例その
あのまゝ文まる丹波のあせの郡久御庄

より御玄猪　餅の名也　備へ奉る事内蔵
寮なり是を形ちし昔より今の世まで御
心をこめ給ひけるにや感じ入まつり
涙をつゝむ袖の裏よりし餅を取出して
懐中持ち御茶持具すへてかくるすべは
御掛物極の一字の墨蹟也是ハ道風の大
極殿をとゝのへられし下書にて代々伝り
来れるを大と殿との其中をとり分い
はせなひてむ御重賞の珍奇のよしか
ぎりのあるましき御宝蔵にありとかや
九家にハおつまじき物也後成ての古今
全部も御書相に有けり

三乃蓮

江州田中村の田中勘左衛門といへる農夫
なりしかれを好み千もと四色の霊葉を
植つめ池をかこめ御をほとし隣をとめ
くる小舩にうかんで心のかよりふく稲
米の束はるようき世乃交りをもとめ尼
あやしき人の名を付けてより一とせ乃
夏は乃くに咲くるへ蓮のなりけ里
愛蓮の詞いふる志てねともすける
心よりさらに書とめるなりし
一茎に七輪の花を　天子の蓮
一茎にミつんのむ　士乃蓮

一壹一論ハ法ましまして百姓乃道と
ハ其名國あおのくはしもれて法人
けもを物ことあること天人の教道
かさんも天路おに心ひとあるうき
世あしおいそやしむへ一郷ハ栄一
しらものしセ徳ハ天子の陽し三徳ハ
武士の嗜一蓮ハ勤れろう菩提乃ろね
なりと念佛三昧の四ましはうに法
泥あておに邪觸乃胸を法へ法ま
鬼永この霊菜の異香を借り

謡乃説
羽衣　實盛　ゆき　うふ　そとハ小町
熊坂　祝言　と多の松ひるを見給り
昔より讃あやまれる所文字の巨釈を云
人あるしいさしら愚意を加へて志ら れ給り
△そのそもも月乃いろ人々
三五夜中のそらまよる
月のこそ人心と名と行草のやつを
写しやする人し文と名と行草のやつを
ろうへるお義もあと
△をのれを日本一の功のもれと
くんてうすりとて

功の者と組おすあとて力者をなぶ笑
へる初しおすあとて力者をなぶ笑
らんでうつと書くるを見てらんでうつと
うくへるしらんでうつといふ説ハよろし
△こゝ恵も旅屋のあるといる
小牛の星のくもりあり
小牛星前に旅雁横ツ 経角堂ハ倫蔵なり
北辰を柱おすとて弘誓真如海乃
文よりり城南淀河乃運送田船のるよ
常灯明をくやし其光心よあらくく
△くもりあり経角堂いられとも
金森宗和上洛の時水よ清あいくこの

灯籠の倒れて苔よ埋れを寺僧よ所
問尋ねよ吾妻の奇物とくてを芭蕉
△うくふやしかるのとくく
烏路善知鳥とも不審の字し東奥の
商人船よて松前く渡るの人のいるハ蛇庚
近き村里ゆしの猟師とも呼ぶ者の笛
なくものあり婚吹よ合おとのやうよ聞く
壱を似せて吾を吹てうくふと
よふし手追の心あ(しるれを)たし立る
列士のものの弥やしるとと云しうくふハ親
やしるくハふよて列士狩よ出るをひすた

笠よかくれ蓑よかくれ宿をかしたまへと
作りうけふり卒土の涙を庚をちすし
鳥類ちし祝子の愛情ふうふ血の涙ゆ
ちけいし命を惜むく庚狀の其心あり
因果を説て殺生を戒しめり

二まふ〳〵まこと四まを七まを八夜九夜
十夜ハ一與二与三与四与五与六与七与八与九与
五六の数をふるを分別〳〵揖の端うを
百とつゝ〳〵る数を合せり

一ヨ二ヨ三ヨ四ヨ 是を四と立て
七ヨ四七廿八 八ヨ四八卅二 九ヨ四九卅六 都合
百の数なり彩の玉水とゝ〳〵と指ゆるし

あゝしやうやひらんとて
心よそをを引けるゝ
醤油本の假名の洒落なるあへは
あゝ〳〵やうや嗚呼危うやうんと書
なるを写〳〵へて羊肉をうしあひる
文句とゝ〳〵ゝ章句のけ〳〵ゝるゝハ
わ〳〵に逆楽回雪〳〵るうゆあ十悪八邪の
海のしけを入声去声にて波の流すを
うゝい消ゆ和句数字義ゆかくゝすて
面白く猛ひあすへ感應なるへ
國栖のうそやたまへを焼ゝ〳〵ものへと
の文句ゝやのやゝを後悔なるし

万句　半面美印

臣祐りたく飛石の奏

盛久の長居はくれる氣をつけて

象のうけ色をきく〜ふ歌く芦賣

仲裏をとくふ　流亀焼て松茸の甲

山田も伊都の男を寸商ふ成

双六の筒うく直ふ手を振り

玉藻り智恵も大きうひく

万句　五字印

界隈の寺は歳つて大砂場

切レをふくんる伯りう歌

家〜乃名所

物ふ俗ふ商ハ男の恋をふとたり

はぐうりはうう思ほれ中とても遊ふ

しう世中くれた心の処をうぐへて

碧碧の衣をはうふる五十のて四谷を

ふりうといつる嵐ふる怠りと奥羽へ

かうふ商人の松ふ旅ふを志ふ族

塵ふつふ玉をいうふ心ふうくしうう

いぶとて海いれとも矢面のうを問

てかりうもいひ処をいとすひすう富

ふ者の海ふはうはうくくく日孔送

かも宥良基公の序記にも遁世を表
とて心を漫々たる名利に紛て著
書形改め附けられん勢の如し猫は
もとより狂蛇なれども狂乱の犯乃
至極しとゝせぬ人なれの諸なる
色〳〵にて國の政六十六部の法華經
納めるる僧あれと各なる聖山の求を心
のなりをうけて伴を忘れ安一[illegible]
しけるハ[illegible]
東叡山中堂　の夕より三の影をうつ
ゝる靈場なれて花の香り鳥の声

まても日枝よりも比叡の心地より
なる日光の荘厳殿ゝ〳〵と池ち廣
沢よりうつくし遠樹高閣風景涌いで
ゝ〳〵なる淀川隅田川多くす名ふ
流れるまと加茂桂よりハ賤しくて肩
ならゝ〳〵り山並もなるとと彩り目黒ハ
ゆゝり山坂なもゝうゝれとてしなて水
遠し嵯峨なれて淋しり世風情なり
曹司谷ハ桂の東立も昔ゝ寺もよ
三光なとうゝ風色なのうゝ茅ゝ伏拝の
床もめつしくハあれど鶯なり仲

山よ高深の寺元改めて[illegible]
住そん法恵[illegible]れ[illegible]を分れるもの
王子ハ瀧落一斤の水ゝ曲水の[illegible]
[illegible]ある舟ゝて[illegible]
ど[illegible]菊をあまたつくりの家居ハ
茶園を所ゝ[illegible]花[illegible]
ゝ[illegible]の第舟の[illegible]目を[illegible]
治山もたゝ興聖寺平等院ゝつけて
祠をのこれさ[illegible]護国寺ハ堂[illegible]
ゝて緑樹陰を重ね町並[illegible]
[illegible]作吉野ハ似て一目千本乃雪

ゝ[illegible]ゝも思ひやるも流れゆく
て口ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]れし淀川の例ハ東南ゝ[illegible]安房
上総の山ゝを凡帆ゝつゝ上ゝ[illegible]池上乃
塔ゝ増上寺の[illegible]を列ねて[illegible]
彩ゝ[illegible]る形容杜詩韓文をあぶり
かの住吉をうつし[illegible]佃島もゝ
岸の姫松のすゝ[illegible]
[illegible]ゝ公家達の[illegible]
[illegible]ゝ仏もゝ宰府ハ[illegible]

はるゝて深川の色る合羽かりはし思河
乃ゝよりゝよ苔ゆ紅む都府楼祇音寺
唐繪とゆくんよ四ツ目の清の根なる報
恩寺の麓乃白地ゆるで町繪の屏風
立ゝんやうし赤立ゝく梅紅葉ゆ
月の末の篇よすりて回廊よ延をよ
くるぱゝり野よ心もとゆゝと一ツ
くゝる疵物ゝ無疵の名作ゆ快
霽の富士ゆて三千世界をゆ
といつるふ我もよゆしとて天よ乃ある
地ゆれて三蔵法師の後りしてゆも

見るふけふ心の止ゆ目ゆ警るゝ蓬葉乃
山とてゆハてゆり也ゆゝゆゝ世よ者ゝ
と勝槩の奇絶をつくされる分限乃
殿つくりのうも表ハしゝゝは素ゆて
遠石両工乃物数奇をゆるハせゆゝ庭山
西川とゆゝ国石土佐殿のゝ材時津とゆ
蘇鉄家と領分名木をゆつゆ畏禽霊
歟をかひてゆちて霊臺霊沼の楽と
鼓吹の色外くもれ安仙壺のとゆゝ秣
刈加賀殿の掃除の者大酒ゆせて酔て
かゝゝも云ゝ酒をもとりてゝの山ゆ

見るに三日粮をつむまでおぼえるのみ
千丈の岸乃白玉あらはしけて辛崎の松に
光倉松にいまてる所松尾塔金ちる姿
所〻くれのる蚌満珠寺をこそ寄る
月香炮峯乃雪にしかへる白い鷺玄
千羽のつまてる汀戸山の雨玄灯篭一ツ
ゆしもてかすす霧杉でりの紹山をい
老僧の茶とゑたやしを白落舟頂乃
毛こぼして百梅お花ふしる御竹林
の風をつかける崖もゆり見いもし
虎の生皮をうたて珊瑚の瞳を入り

金の仏をとゝいでうづくまるかゝいこと
孔雀のひかる家〻ゝ芭蕉のうけ帰
何月桜五百本お染五百かた右お錦の
まゝ秋を所〻ゝ雪場何月樗乃もふ
ちいへゝる張よ埒ゆゝて〻ある所太
追物〻ぬへるあとゝやくちるの炉次
きこ風やうふ木幡の山よ心つけゝるお
しゝし桐谷の千へなる深井の山立の
卧水の清ゝ流ゝ昼夜をすてこゝ
かの塔婆こゝあゝ公〻〻ゝ南天乃色庭
何ゝゝ月ゝ木綿ゝゝの庭月の

をうれもるふめてくり初りとる菊作り
吹上のうてり杜冊の媒と成り菊の奴
とちのうもの京よりも出給鶏ち
投打とるは辻番釈ちれる太刀玉川の
螢をなつめ壁史とめの出るうと根合
叫合打ちるとうほう玉箒をかを
らし出貝炎るた雨よりを迄て月とを
とり光をうすめ瓦を巻めは所虫し
けく苔ふうして昔を思ふ乱草を
拂つる蛙紫を引しする隠居舟ち
なるふ女中まて泥水こうふ粧いを錦

れり大井の逢遥ち吹の山ふうつ日を
夜をふりめてい松ひして尾上よりを
樓閣をの底ふつうり裏鳴谷ふ谷ふ
牛をふうこ子ふの井縄をうちく羊を
奥しこい明石の巾(カワリモノ)を降ひ居士衣う
錫をひうして白兎の玉を確り光
黄鸝の柱(コトヂ)をゆうり名麿ふ猟弘
ものひ一奇大ふ山京を守ゆうり
八方と薄ちのつ鄙の住居をやつし
ち耕し秋ちもる業五十三次乃
羇粮を降け躍泉の北の音ふ

す山閑の称さめする男竹の編戸々
閉わうとをを名のうせかてつりこ閉る
うられうら沢竜よい飯を閉うて
柴の箸ようおくて椎の葉の焼く駝
と菓樹心の閉うよもぎより瓜田を
沓をゆうとを起り已う閉うこ車を
かまひすううめうて柳の志うれる所
ううをと笠の枝よ焼れをむすよ
すぐふうし此清水所茶よ飲せる逸
てうり世人水屋麦とい心新禅
師の記を業玄龍が自ーかめる額と

ゆーーをもも何うに隠元高泉の清莚
ようてゆける袈裟川よるあうい人
養老よりやける形もよ伝ちすれ
蹄をいうーー脛をちうて塘み登れ
を洞屋西湖よ生れうるやうし明
人のうふを扇ようわ拳といの酒
のみりいしを蘇門の雪風を閉ものよ
林学士よ坑を洛をーー雪ルよ花乃
もうの和うを求うり琴琵琶
の検校法師風のちうをりいせい尺八
一節切の名うるゆ門高槻伊丹原

[illegible]ふして山の鹿必ずなみより
笑ひて巣かなすまして猿のことさけして
憎まれし蠅なくてもいかに丞なし
こゝふ長安一日の花をえつくる
百蹄は胡蝶しつくしてはめ
[illegible]の[illegible]ぬくとの後[illegible]門法
大家みゝてこゝ[illegible]所名所見ぬ京土
よなかやゝ心ゆん三都の賦も笑
ひつゝ[illegible]傍の納めおく御経も
説のことされ[illegible]所をもて何
方へもとも[illegible]ゆいん

小巧窓　一章下

塗壺のうしろふ一株寺　嵐雪

名月や柳の枝[illegible]ゝく必
莢(サヤ)のもとゝ豆を乾す　百里
お腹とる尼ふ砧をとゝれて　晋子
正宗しやとて酒ておもる　雪
しぱくと便あり中益田　星
足半たてゝ袖ゝ[illegible]ゝ　子
水鹿(ヲシカ)はたする蛭(ヒル)もい童蓬　雪
琴の師匠を法[illegible]久[illegible]　星
[illegible]国橋て流をを　子
ちすりに後ハとゝ人迹　雪

うゐ白や力車乃わかうを
雑説二本ゝ竜ゝ物
鉢屋といふ人も有衣の名角力
沉香も居侍立結
ちはるの乳房あらゝ蝙牛
紗の金ちしもかゝれ衣
色ぬい横ゝ大原乃花ちり
先孝和ゝ人のちやぶり
蛸引ゝ多ゝいたしゝる巴し
千住ゝ下駄掛もあ
物狂ひ亭主ゝ名のゝ
ゝる紀食の柏ゝ

里
子
言
里
子
雪
を
子
を
雪
子
里

ゝ烟のけむり墨衣言
たゝ名の橋やけらゝ橋本
ゝ多ゝ蓼ゝの花ゝもゝと里
舌ゝちゝて何ゝむ由言
月ゝて鼻汁袋ゝ子
乳母ゝよゝ乳ゝ渠の塩梅を
宍薬の上乃名ゝいゝを雪
股をゝしゝ今中山
鼻墮て影の住居の淋さを
洗ひ河原ゝ二番雑ゝ
引粥ゝ水色のこゝ秋和
瘤乃ゝゝゝ老ゝゝゝ

言
子
里
子
雪

番町の朱子とそやして花ひらく　る
四ツ乃日影の一乃ゑ山吹　ア

小窓後園　二　　潘川

業平乃晴れ　西行乃　里東
落葉乃月乃ひかりみちてて　堤亭
御用木一本　茶筅初沙子　野徑
ものいたゞきすこゝ頭切　暁白
盞をつゞふすりゝ膝乃上　晝る
下モ四五間いやれしやうし　東
茶ちゝ小茶殿乃紋ちなゑ　川
晝ま落洪ハ若鮮乃着

くれも井の心のうちを　虹　徑
うハ水空ちる悪ハ水夜子　白
窮の鶯ひるをりかを　亭
ゆて原ハ大般若粥　る
足乃毛を人むるも奥ハ原　川
稲葉り未ゑ森茶ちすア　東
ゑまハ絶の送乃酒停止　亭
セ乃ゝ書て放す　盗人　徑
服切乃ゑゝも第ゝて山ハ花　る
九の声りしも雪乃瓦　川
かへる度俊茶坊のうびすとも　東
見ても集欲　矢止千万　亭

いたゝ山一ゝ〳〵い所あれを　徑
額めゝをてゝ等ぜう可をゝ　る
回船乃腰へよりをゝ所無小舟　川
舟のゝ〳〵をとふかのゝ色染の戸　亭
四月乃暮　聖の月もり宮れく　る
余ゝゝ〳〵所公所長乃家　徑
和紫将鬼も袁入をゝつけて　東
川見分把水上を　川
中馬ゝ曲印のゝもや普施戻り　亭
阿難　迦葉へ拙るいをゝゝ　る
薮乃色為茶の勢古屈をゝく　川
拂ゝゝしゝ人ゝ喫れを　徑

川音も吼乃ゝゝゝ加茂乃犬　東
内ゝ寝ぬ夜ハ花の松ゝを　早
つゝゝゝ委の源を錦屋し　る
氣阿弥主もゝゝ〳〵を新糸　白

萩遊び　三　章下
三日山戸ゝ

日盛を所金平とゝゝ世莫ゝ汗　晉ゝ
徳の車てゝる板乃ゝ　瑠懋
唐の新面のうこゝ手ゝ肩入を　青流
筑乃駅ゝ者のゝる十六夜　入松
ゝの袖を交ゝく卯屋をゝゝ　貞佐

氷柱くと踏わらし　常役
牛蒡の莖あつ朝嵐　悠
三水ほいくせて橋よ深物　佐
耳聃のほいいむと西ひくを　松
廿中ひとり嚴様よ行る　悠
山村り稲荷社　乗ちて　る
硯　乗ちて　ふ五六句　海
松前よ白乾のうひあり　佐
所小進てそ八十の賀を　る
仲人のすくしろ拵山下風　松
花生の墨あ　江戸町　役
流

中乃料理きくの茎並　作
ひやのみこと物を春寄め　る
玉つ世漆の木の瓦口　悠
けれくと唐茶千ち咲のうへ　役
製法嚢を壇のくしを　流
昼ねを学をくるを　松
庫乃近い也用心をか　役
ほの年次磨ハ浮世乃家所　る
乾乃くく躍ふやめくハ　佐
箒ちの拾いくをハかほつる　松
鉦の弦とつて音あの滝　役
胡麻焼よ白ちくをを社　悠

去年の秋の相を言場くらとする
住和寺をあらまほしく思ひ二隱居
本望をみるまほしく室の名り扨
自既中尾寺とる事ならべて
大内山乃 寐せ石を兼 悠流
初寅や主人のあれやすの子
うとう 所千もけとうとうの 役

續の灯 四 章下

侍友翁酌 格按

水凝るを推も敲も去つる巻
聖 くへひとり書みい便 曾

野孤の尾乃尾を苦労して 風雅
小屋乃著を土塊のけうて 鈴士
百蓋ま笠ハあるしの仰右衆 鹿谷
城ちたうつ鶉の沈る 校
沈ふ障るゆくる鎚屑 子
箱弥ひらける蓋乃切手 京
お應ま鈴木院ハ栖ける 士
卯塔乃ついるけるや 笠
ものハ筆盤ぞあり松も友 柱
うくく袖の涙ハ艇の両 士
附ずしとすされ沈ひひよる る
冠者まれかして光ある 京

鉄肌や十月を出ぬ火打鐵　笠

霧分の仕切りて舟の着　士

あれの多る人に驗氣を問て　笑

祝ひ扇に絵ふらふ　絵子

新年を見る芦の袖ひ面　笠

納屋のそらひよりてらの面　枝

潮十の家老斑花をつなぐ　士

あだおい岡をつなぐ　笑

飴引ひ立る根の除言祝ひ　子

櫛をうけ小屋の者うり　笠

わつてい蛸ひうく縄掛ひけ　枝

金拂ぬすむ指ハまひ　子

押賣の袖周守ひ弘の月　士

けんくいよ付て巳ひ　重勝　笑

舞長り合亦の酒ひすり水　笠

足袋をうする拄ひ　枝

調布のこれを種ひさらす　子

地震この見しを詫ひ　士

白川の歯ヨ衣ひ七世　門の婆　笠

入る筆ひ　京中ひ竈　笑

うりを多勢ひ中ハひより索　枝

何弭ひ笑ハ蒟蒻　笠

竟音ヘ下籠　投ん　船ゆすり　笑

多ひ紫ひ夏　士

白鳥をあなたのつくり山スル風　る
こはくもの月の木形切くむ　枝
琴を稲帯ふそすもも色よ生て　笠
一口乃原を鬼隠相談　る
喰分を松山くの黙阿弥　士
くるれたカ弾くく寸石雪　枝
霄巳り伏五くをる名のうちも　紫
無部郎というくるの粕　士
目をもちて八日の笠の雪ふる　枝
心の板を籠ふくしおむ　笠
一札一つんか商人花のうけ　葉
鯉見てくらす外郭の後　る

神祭年肖げて
国中の果弁当
弁の屁を折ふ寸やめ月冨　晋子
節ちられ一重口よ　百里
表具屋の珠数さくまはて　朝叟
雖くるの乃特鶯嗅る　新真
潘ミツ深るゲ年の元結枕　凡雪
帆をよむ橋やくの際　堤亭
ゲ桜の角久字ふる十三夜　甫盛
枕懐ハ庚の角ケ世　全阿
売ケ仕衣セとるハ蒲の中　真
くもれも泪日ケ大大　る

と捨てゝ
うゝ三羽の孫ハ歴〳〵
野蘭の頤さむ　森乃色
二日醉　みゝ　らの岡
ひめの傘　むかゝ
とゝ情を質ゝ
所柳よりつゝ寅の紙
餐ハゝ中小性
一袋　鈴の具をとゝ
ゝ盃　先幼乃光
月花もとし鞨鼓のお
東海ゝ

里　真
盛　亭
亭　雪
雪　子
子　盛
亭　雪

雪降て病氣ゝ
田舎ゝ
ゝ〳〵ゝ
長河ゝ
菊の卯月
黄蘗ゝ
屋形舟三日つゝ
土芳もゝ
ゝ
ゝ六仕ゝ
月ゝ
文治の秋ゝ判官を

ゝ　真
雪　雪
子　盛
盛　亭
亭　雪
雪　盛

猿ありてもんをつくを一かつを　盛子

うくんを磨て足弦戴々　亭

抹ゝを臭うかろし氣昔　雪

餅の丸ゝを搗出したゝや　直

ありてもれぬ　ゝの抹い昼休　愛

くゝ〳〵側ありてお髮を切　星

ゝの相伴を始る成寺　蟬

ゝの清水の青天の蟬　安

蘇白弦病ゝとゝんて鯛い　子

亭ゝの洞を行ゝし哉

松の塵　六章下

万世のゝを鶴唐を踏

黄　古を引ゝす　昏子

うゝひ雪ふこの芥子酢い涙ゝ

ちゝ孫東や名物ありゝ梅　應三

舩　臥のけんくいゝ寒むすゝを　沾徳

物書ゝ　あゝ笠のうゝ　芝舟

隼の祭見ゝ崇徳月　周東

無地ゝい深世千ゝの葛　貞佐

ゝゝゝを畠乃田ゝ神の秋　三

ゝゝゝ　狂言出す　ゝ

苟ゝつけて物況ある中昔昊ゝ淺野稲荷

とて仲しの猿守あり安永の時
祝のしるしあり京猪七ツ小神社の宮ゝ時
なりゝの苗生ありより是小納受の力を仰て
奉納の三句を彫る
神垣や幸葺きの笠　五葉
南山うけて　秋の物成
かたらめて月の桂乃男氣よ
これゝのうかりふなる世強も
臺の凡てひせるくこゝろく　秋
陣前乃肩を新てゝ　洲
密法の法よりすゝは肥　作
山小面を出て　笹る市篭　洲

呼みる夜叉か　一間ゝこゝろ
鐘を　ちゝ親類乃月　堤亭
霊柏ゝ　踏ゝ鑰の音　洲
陣る出ふ　踊る　秋
いつのこゝろ　袴やめて乃子　三
掛る野　老き　古ゝ信市　作
こゝ年ゝ　ゝ月の孤月ゝ　ゝ
座沉　追ゝ　亭
鉄床　ゝ　大鑄　洲
要公　ゝ　三
夕影乃病人　ゝ　ゝ
茶苑の太鼓泰平を　洲

鶏冠の尻をうけて忘れぬ　佐子
三星祭すへし是を上臈　佐子
貢として貢ようひある永頭鈴　佐子
月黒のもち種糸浴の袖　秋亭
なのるより心をうる松は月　亭
神とつかねるかみ　宗下豆　洲子
金の珠数三尺縄をうけすくも　洲子
洲雨一うりの蕗の漉坂　佐子
信濃者京をもとて夢そう　三
はうくの音も腰へうくく　洲
案内のそれふいくて也むの宮　佐
私当のいきり波畳ゆきり　亭

君臣の塩梅をたれうへいあ
一子葉　春帆　竹平
ちりをはらもるを培梅の芽猶活か　沾洲
ちりはるを出るれ男うてをうも　宜雨
はしるおい梅ても為や名うり川　紆角
うやんけはる名も横をり柳　止倭
負すをてちうへをはの花うは　仙芝
後あり汐より角ちり梅乃秀　沾葉
皆我をのし宮もはうを彼岸ト　朝豊
沾洲関を新てよ弥うはうはは　杏林
その骨乃名を穴よはるかをはは　貞徒
枝葉あて名乃霜乃のうち林　沾別

岡野九十郎故郷をうちすて東へ下
八ちの如を同て
四季咲ハ牛もくいすゝうちうる
といへとやゝ長き其檜のる所
野を追善と沢
八橋の墓 郡のうちやゝ高のま 周東
松寒さく旅人のゆめやうちうち 午寂
ゆゝしかれ素鉄のうちを杜若 春船
八橋で帷子のいてゝ又を弁 当心
塀のうちハ檜旬沢色うち 灌木
うきけうあやめも其夜月ゆり 昌青
指文も江戸のゆうやうちう 菜花

又病死みつうち元服すとうけて
ハちの形をもてもゝの金をつ 胡子
りちおゝ一様つゝりこちうち 琴風
うちうちうちうちてか煮ゆム力ゝ 角吁
井戸二ツハ檜の名を春日霜 入松
をもゝうの錦を引もうちうち 音子

未二月四日
春帆 寂期
寒食の月かゝもゝうちうち
ゝ
梅てのむ茶色もゝ死出の山

三月四日　追善　沾徳會

長崎路のあとも雪の名
羽乃調子を月の角に入　午寂

たゝ[illegible]のせて出る　歌名
踏潰に家[illegible]つゝめの[illegible]ん　晋子

雨のうちさも勝[illegible]ある
[illegible]て[illegible]ハ魔仏一如に狹[illegible]て　沾徳

廣神の言[illegible]宿も[illegible]
恐〻〻[illegible]馬より[illegible]　餅　横几

何乃[illegible]を[illegible]　塩やゝ[illegible]士
[illegible]巴[illegible]の[illegible]の一[illegible]　涼雲

[illegible]と[illegible]

[illegible]くゝ[illegible]ん[illegible]ゝ音　角吁
松[illegible]
荷ハ先〻[illegible]　[illegible]日　塘岩

惜[illegible]　鶏乃結句勝[illegible]
仁右[illegible]を[illegible]日を[illegible]古[illegible]　晋[illegible]

[illegible]　[illegible]の[illegible]る献立　沾徳

蒲座一炷香拜

朝三章下之三吟

沾[illegible]山[illegible]
[illegible]家居[illegible]

[illegible]こ引[illegible]　昌貢

同　枯葉ヨ杉の実の色　晋子
老圃板倉ヨハ痺ふらされて　秀鳳
心川ヨ茶ヨ活倫味噌て問　貢
入月和揖をつきてる脱れる　ヨ
名警うしてんがふ俗し　鳳
菖の実の伯父の杖しらわを　貢
ほ立てを都乃拾ひせひ　ヨ
千年堂一万両乃そだ枝ヨ　鳳
雛よりり武士ふ成すまいり　貢
湯れ歩いすすもて寿ひる墨　ヨ
他人
摘小摘岚と霜ヨやしかえ　鳳
貢

月ふたくほ伊藤蕉乃僧正　ヨ
みやさいをの姉を庶均し　鳳
余ほれ巻ヨ古著うりと　貢
痩さうてつそれもくいの茶盛　ヨ
これそ白夜乃治郎　双六　鳳
捕ものく名ようて呼ヨる　貢
麩乃ほのつくい南禄ちより　風
恋ようくに方の新ハ間あれや　ヨ
はるる地中ヨ脇さの汗　貢
ひし材の鳥ヨいつほつる　鳳
とちつほをハ素ヨもう国　ヨ
手の節れそれそく白ハ心和　貢

蘇快十日ある老の徒史　風子
蓋飯の種よ出よ々々紫蘇蓄　貢
蚤とり虱とるとて水ぼの枝を　風
舟下る死主いとうられの下　子
う迄を薪よひろふ鉢屑　貢
氣ちがひのざんかい不ひてろひて　風
人も仲目さ無河の日を　子
蚤ありつつを戻されて羽抜を
これ雛面よお皮切ありり　貢
花をこの加好なる偽ある五本骨　風
高月冴てちやっと吸物　子

三の蓮　ハ章下　晋子
志乃そ仏の池亭
霖てうと人もすふたちよ新部　東盛
髭箒おあハ何ありうり　百里
木玉より木橈よいをそ口もて　堤亭
牛ハうしろふ形の邪ナ　沾洲
栽物のない搦手を月をし　子
河豚の毒を窓のうふつ子　子
活定ハ思乃大指をつもん　蓼
うつ次目色ま伊番元り飛　亭
信心のきしを変して　洲
旅をけり文王の園

つゝみ笠一重分の付らけ　至
暁の箭を天の下なる　こ
ゆゝしや餅は持屋ふ為る身　参
柿を形つゝ剛力の汗　亭
内侍やう何やらたれも和あし　さ
焼をつゝきて蓋蝋の絵　子
花かさ弁押小袖物なほうせて　洲
うしやゝ行ゝ椒皮　参
涅槃像なきつる方を孫れて　亭
金るを首おうつの山数　子
こ眼ふかけあるのゝ　星
ゆゝくゝ人は捨て小むく　洲

灯の乾見城なり義堂殿　金
箸をうゝて居ゝ与膳　亭
弦〃狂ふ〃天狗ゝは風　星
厚ゝ与おを忘ゝハ為　洲
おおて扇ゝのて月を持　る
かゝをゝはめを略を則　参
薮山ゝ布有お病ゝ傳取て　亭
るゝうゝ入相　洲
風ゝふる縮ハゝ成ゝ　星
融をうゝ水戸の塩竈　子
スパゝと詩うゝせる星ゝ矢ゝ　盛
寺家うゝ西安花の古石　亭

山〻乃檜椹水にうつる　湖
墨原しゐるゝ水のうくるゝ　寺

歌の吟　九章下

忘一れ　旅一れ　秋色

友蘇て鍋し立寒し　悉の九
黄連　もゝひき霜の袖笠　晋
あるゝ早ゝ早ゝ早ゝ　晋
かてゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
月のうちの葛篭男ハくりゝ　子
仙至のうさい酒臭い菊　吟
うゝ同ま蔵てゝゝ　秋色

所三所　あるゝ月一産月　子
打ゝと四条を画て給雁子　吟
水のゆゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝやけかちゝの家辰取　子
筋ゝの条世ハめり笠　吟
きゝていき生のけのすゝと　色
天乃河の化物の首尾　子
涎ちし株ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　吟
あれよ抱ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ちゝと来ゝ花ゝ静ゝ合点　子
白い歯足セを猫色紅言　吟
ちゝめくゝゝるゝ嗅る菓子袋　子

加みゝ山ゝ　扇枝めもく　ゑ
不任の卯兵衛の時を御所　吟
漕もられて い板舟まつ　ま
居風ゑもを新の卯ま歌　色
志のゝのゝ仙墓の給符　ゆ
弼月ゆ小巻ひ沙百文ゆ寺　ま
吹いゆせてもらうのかい足袋　ゑ
色ゆくすくめやせて揮まつ　ゆ
九佛の日記弁十佛のメ　ま
松金ゆ匡留中弁ゆ卯ま　ま
ゆ多くあゆ八玉味噌ゆい菜　ゆ
ゆ鳥ひゝ豆の卯ゑを一つゑを　ま

加乃山ゝさい江戸ゑかい山　ゑ
大義て時本陣おて花ゆ打　ゆ
徳浦ゑしゝしゆ桜調　ま
うゝひ安ゆ心の弱乃鉛ゑ色　色
上下乃者のかはゝく　ゆ

妻の略ゑ松魚より光ゆ　掃尾
号楽ほゝん岩みロ紅粉　万橋
行ゑゑ合掌戸極の糸もて　馬黒
たうゝしさくゆ金を積　晋ま
月の賠ゆ小ゆる使をよびゝ　搗
留ゆ箆ゆを浩然乃家　尾

嘆くことを百度の家もてやつこ　子
ほのぼのとりを茶をへまほ陸　黒
世日れる髪の袋をかりさ月　尾
この米出を何の因孫　撫
顔板ほのめ唯ほ物をめすこ京セ　黒
ぬくとしてぬてこれらの鞠　子
お尺立ま二百せつけさの月　撫
すぐ手扨雲演焼乃　尾
熊本ハ家もやく冠木門　園非
すくるこの子を平臥切を踏　丁楚
舟宗て花の小唱乃手拍とも　黒
拍ひらひてお帯も癖　撫

雲ハ世就虎ま立て泊らんセ　尾
三輪の奉行のまくきぬ百　子
いりあれと草屋上ぬの土めく　楚
達广の皆瓦灯　千サ陽し　黒
ちび行弾流くもてを雪の紅　橋
錦帳ちの庵の新茶　尾
石山の鑰ハおかはの滝の声　子
小くる烏帽子本性て　撫
見弱くあてくる丸ハ思ひ中　黒
かくりすぐ手就と蒼陽　非
霄北月四方百のくり乃張笹　尾
いすくり赤仮債を食ちくも　楚

一丁宮より十五丁村を脇　敷　稽
海松ら切らく尺ばの貝　非
ふれるん天の橋立　奥平　黒
夕日ふるに抽も日三里　尾
幼ずふ隠元　禅師　花ふる　る
白ひふ花ふる艸乃焼餅　黒

家ゝ乃矢に　章下

富士長篇　枕草紙　本ニ海ハ鳴沢の海
ゝ有八海の内の下し雲ふ物ふハのセ
らずす魚桑ハ至帝ふすへてはふの
華奇　書写鳴海の海の誤るや

鳴沢下戸　双乃奇　衣ゝ　其裔
鬱　暮　鶯る　狩のさくめる　晉る
思ふひくもらしい欠をあの面ゝ　来示
筆て心　剪　和ます　友閑　其幄
近松を松京　遠くはいれす　拾技
砌　情ゝ郭る菊乃吹上　孚兄
竹ゝりの翁に　ひゝ　猶庭　る
大切あひ　やゝれり初悪　裔
悪ゝ子所　紡帽子時面る　幄
ゝして流れ　三階乃酒　示
呑料の煙を　ゝにむ三種ゝ　兄
麿ゝ　茄子　砌　海橋ゝ　る

ホイヨとやおれてねむ太鼓たたき　示
月夜乃天吐を敷乃　罰　恠
ちらりと氣波よ勝しお酌取　齋
朝鮮人乃こゝろの俗略　枝
雪ゆゑ赤人のまゆみそり　る
かもひすもゆる胸ハ三ッユリ　齋
安部川をゆくそ錦床乃を　枝
百姓石も鹿る半分　る
目の下よゆゑハ水ぬ捨舎り　示
坂やりすぬ鈎に扇あと笠　枝
ポッ少しする水色を六月十五日　恠
宮本院乃亭ヶ上座　兄

神奈川乃あなかてろしの物淘　齋
ちくしやうを松ヶ禪　示
時ちくの栗の拵弁当を袋て　兄
八ゆゑ（*）よりてみるの原　る
沙見坂小の桝まよ牛れ舌　枝
雅分ヶ七ヶ　恠
入あひすかぬきくと拵や田子　示
もゝひの袈裟も百日の閑伽　齋
神ゆゑ雪弁湯ゆて酒の代　る
瓦坊も　幄
亮孝のこすの据膳を花の宿　枝
四方の絵ハ白ゆのんゆ　兄

繼目の御礼として[illegible]の下官
羽塞[illegible]出[illegible]の耳[illegible]を奉り
[illegible]を[illegible]く古御[illegible]を[illegible]
いとく心の弱[illegible]みせ[illegible]を音[illegible]
門送り乃盃をとりて和[illegible]

具雫

[illegible]は有部二歳や[illegible]乃乃
一種[illegible]ふ五百粒[illegible]音[illegible]
木犀ハ肩うち槌[illegible]れて沾洲
[illegible]の[illegible]乃鄰の穴紫[illegible]
橋ト虹ト[illegible]を組て晴[illegible]
二車[illegible]岌書 松乃紫雫

鼻も目も茨金山乃駐鹿岩和
蒐落[illegible]至極[illegible]藻洲
小普請の鬼[illegible]作[illegible]の[illegible]ハ雫
指とゆび[illegible]文子
早追の褒義て行[illegible]書洲
唯幕のうちもたたこ始[illegible]紅
房鹿の五色乃餅をうろと雫
その蓋行い桃潛を月子
松山乃新ふ舞うの私乃洲
否やもなうしハ沖の石舟[illegible]
花ふ拘[illegible]乃拱[illegible]足てうな和
捨京の幸庚法白を吸亀

卧せる紅粉の色かろうして春日祝　子
狐にうしを門前の物　洲
化けうなぎ　なくも嗅ぎけふ　京
つるのうめ舟やうん氣仕るく　孔
蓋のふるまめ　長や八代賀丸　子
梟の裳　裳や陽隠居の新　雫
伊勢り鞭三条　なるつられ　洲
竜の尾ぶりもと上る錐　子
鉄炮の弱腰　ふ陽夕あられ　京
宿のはつ　ふ陽つ月十日　紅
一葉つく兎の　ふ月　洲
猿りみられ　ぎむ松葉　京

八十島のもくめを拂る野分　孔
藻蒲團の信濃ぶとん　雫
手力雄大飯くひを守りの　洲
この沖出て千年就音　京
錫引の光を苑ゆくの影　子
つゆ通りもも苑のうるこ　孔

槽座のすくとり付る
檀泉とたるてて

爰ものむ世発ちつく細代守　晋子
鶉や松を一ものと考うつう　檀泉
菊の間をかうや蔦の昼ねの　治洲

小幸おいつくるものの露霜　紫苑
檀象の鹿下しるる
鳴をし　そこれをハ江戸有　其雪
一章のの伝秋天万里千帆
漕もよ　ふ　ふ
初露乃しつくや櫂ハ強風舟　雪
二日の月の朔旦勝の耳　苔
宛門乃切くハ酒もり　杯　全
一ゝ也巡領お供られて
象浮の岩を削るや袖の雪　泉
蜻蛉ハ日まてり日ハ時雨　苔

星居　十二　章下
水ふ　ふ　ふ　ふ　て　流
ロ　ふ　人　ま　て　と　て　て　て　を
星　な　つ　ま　を　れ　ら　も
御溝葉ゝく　忘れなるや　悪人中　竹宣
七百足　神　ふ　敬ハ　童子
素達ゝ月ハ　ハ　る　角家ハ　髭士
ゝ　ゝ　ゝ　暖　簡　声　て　呼　幸倫
茶を　嗜と　中　を　都　し　ゝ
ふのもの　ゝ　ゝ　椰　ふ　る　を
床乃ゝ　ふ　厨斗ハ　亜　れ　て　公　い　る　る
目　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　士

保乃〳〵と後はたゞの石原　論
昨夜なつかしい拾得おもて　吟
ゆかしい目みつゝ〳〵て我は雪　主
袖をたゞ〳〵色のお袋の側　子
かゝりてとゝ掛へたりける蕗乃皮　心々
夕ゆり見して神楽舞する　士
流矢の力あはこるゝて馬乃尻　子
つゞきて蒼麥やいけめ綠蘿匐　意
つゞくと初華袖手雨の足　論
低呂の子合へ月乃金札　心々
秋おれを諸行無常も大敵構　士
なれ乃ゝゝい綾のおすゑを　論

大壽乃及竜魚卵花乃色　子
十八町卵濃く曲れ　主
絵ゝて禁野ゝ兎の乱相ゝ　心々
いゝゝの茶向されたる者　士
よゝび生て膝よかゝる五ゝ衣　意
すゝ里國ゝも泣ゝ擬し　論
涙ゝゝる鼻ハ奉書の作りつけ　士
重頼の色ゝゝしゝ美人　主
敵物もさゝゝ岩城のゝの友　論
ちれてたゝゝ萩の深華　吟
兎のゝ勢ゝ入て糸りゝり　子
むゝ　ゝの五智の假菅　主

壺笠を被りて舟の中にを神明あむす
氣霧ては船をたゞ守る世の風
猫ゝとゝ老る宮守り　導輪
一撫の天の羽袖を五合升　吟
大掘きゝ走る巻向乃山　士
入れの為に京さんゝ色りゝ　輪
移ふ吐せるる文り知りし　子
白き垢い二襟りしをゆゝいり　七
竈神流せしやりて其ま　主
雉の尾れ枝を溝し花のゝ　輪
ゝゝゝ紫袖を搦ゝ　子

篇外

三弄笛の食鑑は雛鯉布久と訓は古ハ
布久所とゝやゝ云り腹脹して恐る波のよ
ゝゝゝ形をゝ重とゝゝゝゝ
三平二満すをけゝゝ口もゝゝる
鬼伊前といふ西施乳と比して雪の
夜の衾をゝゝゝゝて楊家の獨ゝを
芳らゝとて訪ハ雛文ゝを盤とゝて分
ゝて九葵三冬の親灸近来の上達
醫師の口ゝをいを吸ゝし
茶の湯をしハゝゝゝゝゝ瓢汁　亘子
鉄炮乃ゝれとひゝゝや雛汁　仝

う表奄の舎屋みな柱の板榛の木乃
嵐のいとふ暁笠亭ばかり者を集め
夕間の灯火をうしてすぐ子引を
さらしけれども例の謀叛なとすもるハ
閑居不善の色敵あると晋子塞ぎ
一方の連歌ハ橋ふみせるを亭坊の
腹立ハ醒てはとなくや

檀泉

難けや米買なとうる假まうる
達を水まはられ一行 沾洌
有るの舟を車をうるのせて 晋子
きつかうてと玉むし 丈松
幾中いの帯まからして初尾を 貞佐

切戸をうして西ハ田乃あせ 泉
一すゝふ仏の鼻とうさめして 松
かりのもうしや吐血三代 子
熊坂と五五中ねいへてを子 泉
大根ハふしすゝ煮る榛の木 依
宛倉へ梓のうちれ水うを 洌
籠てかうくる茗荷何束 指雀
塗椅ふふるふ子ふ子 子
物よふふふ色をを入し 洌
浚れをやうて八百の安の川 松
名とりの老女殿へ盞 泉
ちると入ル塔ほりなけれの白うう 子

昨の清くしへ着到ハ渕　佐
節とる　ゆゑいて晴る春の山　泉
ありしいろ外ふるし定小屋　松
投見よ雨かゝるもみぢ　かな　鶯　佐
裾匂ひ濃　ぬれ　土雁　渕
是やかの義仲様の忘れ　み
階ふるすかハ面ひるれ　佐
供をけかりまくる　屯り　飯　松
大三挺　蓋の忘れ　真帽
昨今にのこるもの　泉
桜もひきもまぶくとゝを　松
舌かゝぬ心ひるきを　ぬるゝ月　帽

悠然として花みべカコウ　渕
鈴の音　蓋を多いていみるく　佐
門多ひかほくる六市れまつ　泉
山曼陀羅　くれとしも二百両　み
駕籠のいやゝ生きてこゝろし　帽
矢筈ハ情い面ひて宮の子　渕
ひをめるてみ　ゆるくく　松

子花菴　酔吟

先ぶを　この糸　河豚汁　丈松
ひの月　沙さい　振り　美　五出
初鮭や　寸法の書　ひ物　長帽

柿之給　一休和尚自讃

冷泉公の奇品として昔の古筆を
嘗て獲の一巻をあらはし中く
似るべくもなく平其気質の稟々
しくうつしたるを志かとを
まに病僧とおもて見あてうつし
東潮

もすゑ矣へやく　柿　俵
うゝ　無　なる秋を山人　夏
百心の鐘つき賃を催し　青嶺
鶴沼のうすゝ　舟　おくる　以魚
太体

むらゝ　南乃詩ゑ辛い彩　波
瘵癡の笠ゆめてい　柿の子　子
いのちたゝかに蝶乃口もと　嶋
春を世ゑ止やすしの枕ゑを　魚
遠ゑも　ゆりて城乃塗ゑい　盛
千歳ゑ膳のすゝをのゝ　出る　潟
五間つゝ　ゑ西日　鳴高沼　嶋
年寄ハもしつゝひの木綿坊　盛
うゝ也軍と涙ゑくゝつ　る
偽山の心ゑ乃れを刷毛を　魚
宜祢うゝ　ゑ　ゑ　ゑ　潟
貝焼ゑ月雪花やすゝ　盛

奈良をつとめてやまと清酒 峨子
小袁具乃ゑをかゝをてゝれて
かゞ乃もゝさすする器の帆柱 魚
水腐い宮古のをかうきたうや 酒
初ゝしの蕃ゝ合撒の水 鉢
蛸なんと脇ゝられぬ但せゝり 弥
大阪秘蔡乃利腕を取 酒
達广寺ゑ思ひ枯る雨やゝり 魚
かいご祭乃素袍 子
あ仙の勝付ゝる ゝゝ 鉢
一ゝゝりても訴状はゝ 峨
江ゝ者い甲斐乃灯ゝ白 魚

かゝ阪関潮を色越への秋 子
桐情ゝ口ゝ高なれゝ切情を 酒
豆をゝいらやゝる味噌掘 鉢
柏ゝ水ゝ左右をゝてゝゝ 峨
蒔鶏乃浦の節ゝ淋ゝ 魚
名將の産栄(ハエ)名ゝ蛇の咲 子
甲ゝゝ巳乃ゝ子比玄 業

金杉のゝゝゝゝ志の屋
大津ゝ百松本の牛ゝ休めゝ 音子
皿鉢ゝ設乃磯あけや心を
漁ゝゝゝまいゝゝ澤浮の風 貞恒

假寝の途に花天暦苔むして　仙霞

九月廿八日　長安を矯給　沼洲

陳瓶の月推矣の場もあらぬ　横山

上蝋のけし蜀黍の真子

新田姫皆如鏝て拵てり　依霧

幸　泊を出くく敷皮の空

ちぼつとしに口中腫す火の井　洲

ひらひ買して寄る岡拵　山

逢ひると泊定を出酒の酔　子

嚏を井紅をあれ桐の墓　洲

の中物を金の封切あるに　山

後法度の名いあく逝月　依

九月廿日　あはさやうの骨掌痛　霧

原田次郎の袖に世の高　る

高の茶に物相飯も百人一首　洲

お湯桶あてはきくけるの　山

講中の已に夕はの五　る

通辞をたく故に滄海　霧

内この俄をの水錦夜を　依

けの色瘧やと子を悲る　洲

新すと敷るはもを司の　山

新年むるの水の瞻蟬　る

大宮を天笠とり月見しを　霧

陣の引頁の廂一本　依

掃庭す識流す篠縮
り山醤〳〵雪車の餞あ
裾の血をたごくいりみ相撲
狹を素袍をいつのそ
屏風塀あるもをろい立ことめて
股のたつをいをを濃つ
留守居股朋遠方ゆるさり
俵ふたふ箭の春情むを
塩竈の縄をかけを干浮
千とせ乃坂をかゆ坂

藤家謫居の人を弟卯毎て世の中ゆう
ゆゆを忘れるを盃くくくろの散乱を
たつのをを居てくくわゆるを居る扣
千金ふもかへすとゆ沢竜の自畫ケ月や
流人のうすけ舟とあるくをたるまく
ゆるを物く鎧合の一るををれくく
ゆるをの何ゆくくゆくくくの日記音
をの一風伝流をたるたゆるゆるを乃をる
くくれの舟のゆくれを波ふゆくくゆる者
何を路むゆて茶をゆたてを面ゆと
俗ゆる句をたくの袖乃ゆ面といゆ
捨ゆくくをくり

新月の海給おもしろき便うる　楓子
昼の日曇ども霧も籬の内まで生　音子
海辺の風雪に塀せらるるて　岩翁
知の面あ海国の玉ちれく八　暁白
他国表、櫓もの舟う忘次第　大町
あかつれるものふ松いたるく　さるを
初雪のさうる来めて、秋うる　孔即
切所　蓋ども四ツ限　堤亭
陸れ高くハ筆むつ〳〵海の声　昌貞
石のも見〳〵水の海判　琴風
隙山水の未いもつも山隙つく　紫石

此宿を江戸を古郷　反橋
世中を庄八の目ふ〳〵ろく　音子
二枚の何る柴の子寒子松　楓子
仏とい大髄ちをつ立て　止水
ふそこりやむとすて昇進　其雪
縁をうつるの室何人ろう　ゆる
うちい孤をつ子菊ち　大町
虹梁の蒙をとられて秋の月　暁松
ちぬ〳〵ようけて配り上下　岩翁
ふふて士農工商さくや姫　其雪
ふう扇る山吹を　分　紫石
雷を呑〳〵いてうる〳〵　琴風

何を書けばみんなしの蛍　昌貢
消れの土蔵て泊る暗闇と　堤亭
河原とくらべて吸物を嗅　止水
逆刺も夜の錦とつのやて　岩翁
女を　たとへ　たとへ形　晋子
見うしなんのくるまする志ほる大指の血　及拙
地蓋を　梶て　白　梶　ろ　咬松
豆蟹の塩辛　酒て　月の　松　紫石
どうたのたつ　仕を　人　琴風
見つのくのちよつと　稲荷を　ゆせ　止水
撫ようほ　袖の　ちうう　み　楓子
箱根　河を　血天　階　ろのひちひ　晋子

田中の　ろ　すわむ　年　紫乃
ちうの世を尾ひれかすず氷鄭　昌貢
付受　ひ　ひ　を　看　鉦の際　大町
栄想ひ　る　お　あ　ろ　る　腹の　紙　紫乃
土や　ひ　し　の　骨　る　京　色の　畑　杉郎
掉庶の　掉　れ　て　る　れ　掉　暗　琴風
ものろひ形て　ぬ　く　の　寿　岩翁
剥　蜜　る　頬を冷せ　月　れ　堤亭
敷　洲　ひ　て　き　楓　橋　て　止水
ちて目　ま　八　笛　し　り　子　小　脇　美　紫石
こくの　輪　京　の　弁　る　蕉　みて　咬松
故条の　ひ　ら　い　彩を　日　ち　ち　向　大町

陸地へ賽を賣囲者市　昌貢
大釜乃ハあいをゝる者の名　晉子
ほ生とゝ云ゆる引出乃和義　桃子
三
那初黑しもおいほゝく　覗川　書物
人ゝ何ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　移印
夢はゝり母袋へ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
尾のあるゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
吐ゝとゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
切者ある　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
切籠の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝの月　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

裕誇乃場を志め世ゝ　世ゝ
山側ハゝれ露重のあるゝ　大町
千里を行も様ゝの足　昌貢
百ゝの人ゝ技用乃雪乃中　移印
なしゝとゝハ廣い制れ　岩谷
三
ゝちゝて伊豆の小山の花ゝ　楓子
面の格ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　晉子
ゝゝゝとゝ　ゝ　ゝ　ゝ　止水
五人ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　友梅
非ゝ月袖ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　移印
吾捷の　ゝ　ゝ　ゝ　昌貢
冷酒ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　大町

腫物苦る世間目前乃鬼
三方の底うちうへ安政やり茅　琴風
和尚の便宜まゝ長もち　咲松
ゝ鉦を結ぶの町屋ゆりかれ　六谷
畢竟ゝまてあゝれるゝ　松郎
咲乱をゆをとをゆへ作の鞭　止水
むゝのゝつくい三すのゝ伴　堤亭
久ゝゝしのすゝ聲の中入ゆのゝし　大河
鞭市竜まゆゝ　むの徒　琴風
ゝ列も杖つきはをのつゝ　昌貢
口相るまはのゝゝ其阿他阿　桃子
恒らすこゝらへこゝゝ

ゝゝゝゝゝ物に大親乃貢　咲松
六尺の海ゝゝゝ世咲氣ゝ　琴風
お徐下譜ゝゝ石摺　昌貢
永宿の灯の乃の作あ　堤亭
ひゝゝ二ゝゝを食乃乳　晋子
嚢ゝゝ中花へおて寿の月　桃子
丁を隙日と丁のおゝつ之　松郎
角町のゝ下ゝゝ秋ゝゝ　岩翁
ゝゝゝまつれて帝を弱める　止水
奉幣使何もまゝに　鈴郎　咲松
帆おゝを寄かへる三尺の海老　堤亭
つゝゝの孔をゝめる古掃箒　琴風

[illegible]られつゝ錯の間の富士　大町
昆合よ膝ゝてなをしたりし　晉子
二六對なる小向乃　毬　柳子
花多の改元觸てゝ笠山　昌音
旅宿も庵る曲水の　辨　井己

右巻〻文類の大意をつけて引合せ
精稿すへきを此光お犯ちゆ〻
寒暑心勞ちくて雜篇一冊ゆ
略し結り掌舒讀考の後各其
[illegible]弁ゆ[illegible]きあし

昔紙巻物ありしを宗祇法師も門の
[illegible]
[illegible]
又義を感通せられしあやまりのまゝ
分部より別の詞書をそへられり
定家卿の序書を宗祇の外題と代をかる
[illegible]各物を拾ひ[illegible]
元禄十五年壬午　文化四丁卯三十二年
聖廟八百年御忌　西行上人五百年忌
宗祇法師二百年忌　貞徳翁五十年
霜月十五日懐旧の心をのべる
帯解も花をもられの昔か　晉子

甘の古記九のすゝめて昇殿ありし音を
いてるゝし夢想を祝し侍る會盟のゝ
つけて才士文人筆を墨にしてゝ其
名言ゝ人の多忌よりゝ合はるも風俗
おゝゝゝに飛梅のゝゝ変云むへきこ
あゝゝと

晋子

松梅や何ゝある年を八百所

亀井戸千句奉納歌句略之

荒木田守武獨吟誹諧千句之奥書

右御俗ハ千のゝこと独ゝ句立新ありなれとも
俗意ハ成ゝゝ色ゝ句も立たゝ色ゝめ
ちんの祭りよ伊勢を取へゝゝ一あるもとより

二ゝ

二ゝゝ御俗の句幡ゝ寄ゝて長二句ゝゝあや
命ゝ九れ七二ゝ有雅ゝ張りゝく大ゝ千
句ハ三日ゝ迄ハ是ハゝゝ二日ゝゝゝゝと
思ひのかゝゝあゝ引和ハ歌ゝ俗ゝ庚申
ゝハ二百韻ゝて五日ゝゝゝ其ゝゝ
百ゝん周桂ゝゝゝゝの式目いゝゝ都ゝ
いゝゝゝゝ若ゝ式目ハ予ゝて宗ゝ
定ゝゝ法を用ゝ多ゝゝゝゝ合せ
ゝゝゝ変ゝゝ心ゝゝゝゝと所ゝ云ゝハせる
俗言私ひれる心祠一句彷彿ゝゝゝ下の
おれと何ゝゝの中れきハゝすくゝゝ
ゝゝ梅をいゝひてみゝゝはゝゝんとゝゝハ

ひろく花実を尋ね風流をもとめて白正く
ひておしくはんやうたと世この好士のを〳〵
あるを千句八吟れをもとちかひとく満〳〵
一念をりよ春秋二句結ひ〳〵も不もをなし
られやも正風雅人の耳ふれ入ます玩を
笑しんはたらひるる幸ありしや其上粉骨砕白
身のしゆあり仮又さーあひも時代よりる
五子ゆ〳〵をなをさんも新にひ〳〵なり
拙れと雅信何ようもあき跡ひとく好ま
ひる方の云種をれと伺う又世ゆ出ちんや
中連吟よ嘉ひ〳〵ふるへ〳〵ふ大事し本連吟
無載ゆをとゆて〳〵ものひ他念ふ手ようて出

座ゆ出す催し庭を帰〳〵つなみ高や
夢をるんせ舞入ゆ一橋を引ひり宗碩八文
かりたしの自讃よ入おのひ母を掘ゆさし
宗祇ひり変〳〵彼句れと乃伺ひ近く
宗牧一三座忘れ〳〵〳〵らを為ひよて
思ひるひ伺るし追加五十韻おほられと
祇公三時よて千句二折を思ひもる拍ひし
さて古来まれるる掘ひ千句成松の栄乃
西木のひ〳〵月出ゆや伺〳〵ん
これを勢刃山田の住反朱ゆひもとゆ右の
真跡あるを原兎高を〳〵て御〳〵ひ
写伺ひ侍ゆ〳〵し